

## 戦略的な留学生交流の推進に関する検討会（第4回）議事要旨

### 1. 日時

令和5年1月12日（木）10時00分から12時00分までの間

### 2. 場所

文部科学省 13F1・2 会議室

### 3. 議事概要

議題1について、東京大学、芝浦工業大学及び東広島市より資料1から3の内容について説明があった後、委員による質疑応答及び意見交換が行われた。また、議題2について、事務局より資料4の内容について説明があった後、委員による意見交換が行われた。発言の概要は以下のとおり。

#### （議題1）

##### ① 東京大学からのヒアリング

○国際化推進のためには、英語で授業を行うだけでなく、学生が英語で議論可能なことが重要。総合的に学生の英語力を向上させる必要がある。

○大学の国際化は進んでおり、英語のみで卒業可能なプログラムが用意されているものの、外国人学生のリクルートの時点で、その存在をうまく発信できていないことが課題。

○留学生を獲得する上で、アドミッションと奨学金の連動は重要。合格と同時に奨学金の受給の可否も分かることが非常に重要。

○留学生に限らず、優秀な学生が切磋琢磨している環境を整えることが重要。留学生が研究室全体の3割を超えると公用語が英語となった経験があることから、世界から優秀な人材を獲得するためには、このクリティカルマスを越えることが非常に重要。

○早期に海外の学生と接する機会があると、日本人学生も触発されてモチベーションが上がり、自発的に様々なことに取り組んでいく。一方で課題は、学内の海外派遣プログラムに立候補するのは外国人留学生が多く、どう日本人学生の背中を押すか。

○工学の分野では修士課程卒業者に産業界で極めて良い職があり、世界的に人材獲得の競争となっている状況。優秀な人材をアカデミアに残せるよう、大学における自由度を担保し魅力ある環境を整えることに尽力している。

○海外の学生への情報発信について、海外の大学では、国際連携オフィスを置き、専門人材が現地に赴きリクルート活動を行ってノウハウを蓄積している。例えば、他国に活動の

拠点を置き、入学だけでなく奨学金の支給まで決定し自国に留学生を連れ帰るというやり方も聞く。ホームページやワークショップによる発信が主体では、他国との留学生獲得競争の中でなかなか日本の大学の魅力を伝えられない。

○一部の国・地域から優秀な留学生が多く来ていること自体は問題ないと考えているが、一方で他の国からの留学生が少ないことは問題だと考えており、そのための奨学金の整備等が必要。

### ② 芝浦工業大学からのヒアリング

○留学生の獲得に向けては、大学が留学生にとって魅力的な教育、研究の場であることが重要。世界標準の教育の質保証や研究力は必須。

○留学生受入れに当たり、事務負担や教員にかかる負担として、日本の教育は海外と比較して科目数が多いため、英語化が挙げられる。加えて、留学生を受け入れた後のサポートも事務が行うため、受け入れた人数が多いほど負荷がかかる。このため、UGA

(University Global Administration) を配置する等して留学生への対応を行っており、高度な専門性を持った UGA のような人材の育成も非常に重要。

○大学の国際化に関する取組を全国展開していく上で、文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業 (SGU) によって、コンソーシアムを組み、他大学も参加が可能となった。一方で、学生向けの渡航支援等もあると、国際化の取組が広がりやすいと考える。

○大学の国際化により、日本人留学生数は、確実に増加している。また、奨学金の充実や短期の PBL は海外渡航のきっかけを作り、その後の留学につながるという点で重要。

### ③ 東広島市からのヒアリング

○大学と市が綿密な連携をし、単発や個人に依存する関係に頼るのではなく、包括的、日常的、継続的、組織的な関係を構築。行政資源と大学の教育研究機能を融合・活用することで地域の課題解決に資するイノベーションの社会実装と、人材育成のための競争の場を通じて持続可能な地域の発展と大学の進化を共に目指す構想を進めている。

○賛同した企業も参画し、大学周辺を実証・実装の場としてまちづくりを推進。地方自治体、大学、民間企業がそれぞれの強みを持ちより、地方創生の新たな可能性を示す産官学連携のモデルとして注目されている。

○今後、情報技術やカーボンニュートラル等、社会や地域の抱える課題を中心とした実証フィールドを提供することで、学生のアントレプレナーシップ、ベンチャー育成、大学研

究シーズの技術移転を組み合わせ、人材育成メニューを充実させる。加えて、海外からの研究者、留学生の招聘・育成を行い、人的ネットワークの構築も目標としている。

○特に留学生に対しては、本人と帯同する家族へのボランティアによる日本語教育や、同じ国籍同士の留学生と技能実習生のコミュニティをつくることで、住環境に関する情報共有の場を形成。また、地域の清掃や祭り等、地域住民と外国人をつなげる仕掛けづくりにも取り組んでいる。

○大学の留学生窓口と密に連携をし、大学に赴き行政手続きに関する説明会の実施や、留学生向けの手続きガイドブックの作成をおこなっている。

#### (議題 2)

○国・地域ごとの国際教育交流の考え方について、国・地域ごとにどのような国際教育協力の在り方があるか、受入れと派遣のどちらを重視するのか、または国際共同研究とダブルディグリーのような国際共同教育等、異なる国際教育交流の在り方の考慮が必要。

○今後特に戦略的に交流をすべき国に関して、地域という括りではなく、一つの国として戦略を検討していく必要がある。

○留学生交流全体の意義・目的については、「成長」や「世界的課題の解決」という観点も入れるべき。

○意義・目的において、留学生が日本人学生と出会うだけでなく、地域など様々なステークホルダーが連携していくきっかけづくりなどを大学が留学生を巻き込んで担っていくという観点を明確にすべき。

○日本の大学の「教員」「職員」という2つの役割だけでは国際化を進めていく上で非常に困難。大学が教育・研究力だけでなく、アドミニストレーターとしての力量を培わないと、世界と対等になれない。海外では、そのような人材(SIO: Senior International Officer)が大学院の学位を当然のように取得している。

○海外との相互交流を進めるにあたり、JASSOの海外留学の奨学金は、日本国籍の者や永住者のみならず、正規生であれば外国人留学生がプログラムに参加する場合も支給可能にすべき。

(以上)